
超次元ゲイムネptune m k 2 男の娘だった女神候補生

トマト畠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超次元ゲームネプレューヌmk2 男の娘だった女神候補生

【EZコード】

EZ219Z

【作者名】

トマト畑

【あらすじ】

かつてゲームギョウ界の平和を守ったシルバーハートのユウ。今は二ート化した妹達の為にいろいろと働いていた。そんなユウの前に次元神を名乗る者が現れる。もう一つのゲームギョウ界を救つてほしいと。ユウは旅立つ。新たなる姿となつて…。

『今私は女神候補生のシルバーハートです!』

女神候補生シルバーハートが今世界を救う為に旅立つ。

第0話 男の娘な女神様（前書き）

はじめましてとお久しぶりの皆さんトマト畑です。あの衝撃のラストからの続編です。

これは原作キャラが最早別のキャラへと変貌したかの如くキャラ崩壊しているのでそう言つのが嫌いな人は回れ右でお願いします。

第0話 男の娘な女神様

さて皆さんお早う。こんにちは。そして今晚わ。

唐突で申し訳ありませんが私の名前はシルバー・ハート人間の時の名前はユウと申します。この世界、ゲイム、ギョウ界を守護する女神の一人です。一応四人の女神の兄をさせてもらっています。兄？姉じやないのか？残念ですが私はいいや俺はこう見えても男の子「いいえ男の娘」なんです。ん？今何か雑音が入った様な？まあいいか。とりあえず今から妹達の朝ごはんを作らないといけないでの失礼しますね。あー忙しい。

第0話『男の娘な女神様』

俺シルバー・ハート事ユウの一日は朝妹四人を起こしてご飯を食べさせる事から始まります。

「お兄様、私前から気になっていた事があるんだ。」

「……なに？」

「お兄様は胸が大きい娘と小さい娘どっちが好き？」

朝からいきなり問題発言をしてきたこの娘はネプテューヌ。女神化した時の名前はパープルハート。女神化前と女神化後で性格がまったく違うのが特徴である。そして別名『年中発情女神』である。

「……ネプテューヌ貴女やつぱり馬鹿ね。お兄様はつるぺた口りな胸が好きに決まっているでしょ？。具体的には私の胸が好きなのよ。

このネプテューヌを馬鹿にした他の女神達より一回り小さじ女の子はプラン。女神化した時の名前はホワイトハート。キレると口調が荒くなる困った娘である。そして別名『愛すべき馬鹿』である。

「朝から馬鹿馬鹿しい会話しないでくれるかしらせつかくのお兄様の朝ごはんが不味くなってしまつわ。それにお兄様は胸なんかで女性を選んだりしないわ。だつてお兄様はこの私を愛してくれているのだから。」

「まあ愛してはいるけどあくまでも兄妹としてね。」

「わかっているわお兄様。兄妹としての禁断の関係を私と望んでいるのは。でも焦つたらだめよお兄様。私はじめではコスプレして自宅でつて決めているのよ。」

「こいつは駄目だな。」

「この何事もないように危険極まりない発言をしまくっているのはノワール。女神化した時の名前はブラックハート。別名『ムツシリスケベ』。」

「今私の中にお兄様が作った食事が食道を介して胃に落ちていくのがわかりますわ。だけどその食事の中には媚薬が入っていて私を発情させたお兄様そして私をきやーーー！」

「もつと危険なのがここにいたよ。」

この悶えているのはベール。女神化した時の名前はグリーンハート。またの名を『歩く妄想発生器』。

「因みにコウは限界お兄ちやんなんていう別名が存在します。」

「イストワール俺の別名は内緒にしておくよつていつたよね？」

今俺の別名を暴露したのは合法口リ事史書イストワール。ただの変態である。

「ちなみにコウの好きな胸は揉みじたえのある胸です。」

「「「「よし、勝つた！…！」」」

勢いよく立ち上がりガツツポーズをとる妹達。

「いやいや待ちなさいよ。あんた達お兄様今私の胸が好きって言ったわよね。」

「いや言つてないし。どう見てもイストワールがいつたよね？」

「てめえ言わせておけばいい気になりやがつて…お兄様はな、ちつちやい女の子が大好きでたまらない変態なんだよ…！」

互いの襟首を握りしめてにらみ合つ一人。どうのヤンキーだよ。

「いや、ちよつと待てプラン。俺は口リコソではないから…」

「良い度胸ですわね。新妻の前で人の口那を奪おうとするなんてこの泥棒猫達！！」

「お前の妄想の中では一体俺はどうなつているのかな贝尔さん。」

何故か両手に箸を持つて構えるベール。何やつても絵になるな」の妄想発生器は。妬ましい。

「お兄様私納豆嫌いだから残していいかな？」

器に入つた納豆を俺の前に突きだすネプテューヌ。

「食べないと立派な女神になれないよネプテューヌ。」

「ならなくともいいもん。お兄様に永久就職するから。」

「なら間接的にこいつらに叔母さん呼ばわつされる事になるよ。」

「それでも私はお兄様がほしい……」

「ネプテューヌ貴女お兄様に愛の告白だなんて……」

「良い度胸してんじゃねえかよ……！」

「今日とこつ今田は決着をつけてあげますわ。」

最早手が付けられない妹達。だが俺にはそんなこいつらを黙りせる魔法の言葉がある。

「お前達もしも喧嘩したらおやつ抜き。」

「「「「…?」「」」」

「それは酷ではないですかコウ?」

「いや別におやつ位なら別にいいんじゃないかな？」

「あれを見てもそつ言えますか？」

虚ろな目で誰もいない空間に謝り続けるネブテユース。

お願い許してお兄様。何でもしますから許してください。

膝を付き、じちらを涙目で見つめるノワール。手は常に十字を切つていた。

「もう妄想なんてしませんからどうかおやつ抜きだけはお許しくださいお兄様。」

妄想がなくなつたらお前に何が残る？

「ううう、ぐすつうわあああああああん！！お兄様の馬鹿あ！口リコソ！チビ！サディスト！シスコン！」

それ以上言つたら怒るよ。

「どうですか？」

「何とかしてイストワール。」

「つやつがないですね。皆でえりりとウガベシ"の下腹していた

雑誌があります……その名も『巫女大全集』……

イストワールが掲げた雑誌。あれは月に一度販売される巫女好きの為の巫女好きによる雑誌。定価680円。

「馬鹿な完璧に隠していたはずなのに……」

ベッドの下に張り付けて光学迷彩で見えなくしていたところの……。

「まさかお兄様があんな低俗な雑誌を見るなんて……いやこれは違うわ……。これはお兄様のサイン。

巫女さんのコスプレをしてほし……といつ遠回しの願い……」

「巫女服なんてあつたかなあ？」

「いや寧ろ今は全裸で攻めるべきですわね。」

「馬鹿ね。巫女服はある程度着崩す位がけつどこのよ。神聖な巫女が口を釀し出す。まさにギャップ萌えよ。」

「とりあえず今之内に逃げよう。」

「それでコウ。この本はどういう事ですか？」

残念俺は逃げられなかつた。イストワールによつて行く手を阻まれてしまつた。

「そつねお兄様私達の誰かにカテーテリライズされているならまだ我慢もできるわ。」

「でもこの中で、いいえ。」

「ゲーム、ギョウ界の主要キャラの中でも巫女なんていないよね。」

「……これはお仕置きね。イストワールライターを出しなさい。」

גַּתְּנָהָרָה

「待てよ。お前等何をするつもりだ！？」

「何をつて
……。
」

燃やす。

無情にも燃え尽きる我が巫女さん達。

これは僕の黒歴史の一葉である。

朝ごはんと巫女さん達の火炙りが済んだ俺は食器を洗い、洗濯物を洗濯機にかける。

そして居間に掃除機をかけようとした時であった。

「やあユウ君せいが出るね。それとお煎餅頂いてこるよ。」

掃除機の進行方向にノンビリとソファーに腰かけた500㌘ちゃんがいた。ちなみに彼女が食べてやがる煎餅は俺がストックしていた物である。

「 5 つめ・ちゃん 一体どうやっていつもいつも天界に現れるの？」

「 ロッククライングと言つておくよ。」

5 つめ・ちゃん。ゲームギョウ界のストリート//コージシャン。その歌は世界を震わせ地震を起こす。そしてその歌は人々の理性の枷を外してしまう。さらにその歌は地殻変動を……とあります彼女は凄い奴。普通の人間が天界に辿り着く事はあり得ないと言つておきましょ。

「 聞くだけ無駄か。悪いんだけどそこ退いてくれるかな？掃除機がかけられない。」

「 いいけどボクの下着の色をあてたらね。」

「 お前何言つてんの！？」

「 当てられなかつたらボクの全力を持つてユウ君の全てを奪いとるよ。」

「 ……じゃあ青。」

「 流石だね。正解。約束通りボクは脱ぐよ。」

「 お前いい加減にしろよーー！」

「 大丈夫だよ。ボクの全力をもつてユウ君をへブンさせてあげるよ。」

「

「言つている事の殆どが理解できないんだけど……。 5pb・ちゃんの存在自体が俺の「存亡」を揺るがしているからね。」

「ひづなれば力強くで……！」

「何で俺が脱がされなきゃいけないの……？ つていうか離してよ……！」

何故か5pb・ちゃんによつて脱がされようとしている俺。 だが俺も女神の一人だそう簡単に脱がされたりなんてしない……！」

「……あり得ないわ。」

そしてその光景をポテチをかじつて闊歩していたノワールに見られてしまつた。 これすなわちさらなる火種なり。

「あり得ないわーーー！」

走り去るノワール。 縮まる俺の寿命。 加速する時。 崩壊フラグが乱立の天界。

「までノワールお前今重大なる間違えをーーー！」

「行つちやつたね。 パリン。」

「まだ洗濯物だつて干してないのに。」

何どうでもよさそに煎餅食つてやがるこのアイドルは……お前が変わりに洗濯してくれるのかー？

「そんな泣きそうな顔しないでよ。……しかたないね、ここはボクがあの四女神様を足止めしておくから買い物でも行つてきたら?」

「倒してもかまわないからね。」

「ボクに死亡フラグは効かないよ。言葉通りに受け取らせてもいいよ。」

「よし、それならちようじプラネットコーズのスーパーがお昼のタイムサービスの時間だつたけ。よし安いのこっぽい買つで!...」

「コウ君は絶対良いお嫁さんになるよな。パリソ。」

俺は男だ。そして妹達が自立してくれるまでは結婚なんて出来るわけがない。

タイムサービス。それは主婦及び主夫達の戦場。

タイムサービスそれは普段では手に入らない高嶺の品物を安くで手に入れる事ができる庶民の味方。タイムサービスそしてそれは家族の笑顔の為に闘う物達が集まる聖地。

「なんていう気迫だ。やはり卵一パック50円の効果はすさまじいんだね。」

「あらうほんと。女神様もタイムサービスは見逃せなかつたのかしら?」

「あらうほんと。女神様もタイムサービスは見逃せなかつたのかしら?」

「家族が家で待つてますから。」

「本当にいい娘ね家の息子の嫁に欲しいわね。」

「そんな事したら息子さん蒸発しますよ。文字通り。」

「それ」「コウちゃんは私の嫁だよ。」

「REDDちゃん…」など何をつけるの?」

タイムサービスでよく会つねばたらんとBさんと会話をしているとロイヤルエンペラードリーフのREDDちゃんがこのスーパーの制服を着て現れる。

「あ、私ここでバイトしてるんだ。正確にまじのスーパーの助つ人だよ。最近売り上げが減つていてるから助けてくれと言われてね。」

ロイヤルエンペラードリーフ事REDDちゃんほどなんに経営状況が悪いスーパー、マーケットでも3日もあれば立て直してしまつ遅いロイヤルエンペラードリーフがあるのである。

「通りで最近いいのお齋が増えてるわけか。」

「「REDDちゃんはお買い物?」

「タイムサービスがあるらしいからね。」

「あ、あれに参加するなんてコウちゃんはチャレンジャーだね。ロイヤルエンペラードリーフの私でもあれに参加するの無理だよ。」

「まあ毎回怪我人続出だもんね。」

「じゃあ私は仕事に戻るよ。がんばってねユウタちゃん。」

「うんわかった。まあ振り切るぜ。」

俺はREIちゃんの声援を背に零刹那を鞘にしまった状態で構える。

『お待たせしました。これより毎度お馴染みのタイムサービスを開始します。まあ主婦よ主夫達よ闘わなければ生き残れない！－！』

「始まつたか。絶望（品切れ）がお前達の『ホールだまあまあまあああ－！』

その後俺は阿修羅さえも凌駕する主婦及び主夫達を切り払い、殴り飛ばしてお一人様3パックまでの卵を3パックちょうど手に入れてレジに並ぼうとしていた。その時Sギア（銀色の折り畳み式の携帯電話）が誰から着信を伝える為に着つたを奏でる。

「はい、もしもし。」

『やあボクだよ。』

「…………誰？」

『君が愛してやまない人だよ。』

「靈さんー？」

ゞ、ゞうじゅうひ。緊張してきたよ。お賽銭あげなくてはいけないのかな?

『その通りだ。わやんだよ。』

「…………間違い電話です。」

『「じめん」めん。それより今ビリレーレのへ。』

「…………プラネットコースのスーパー『戦場』だけビ。」

『悪いんだけビつこでこお菓子買つてきてもうりつてこいいかな?』

「確かに週間分は買い込んでいたはずなんだけビ?』

『女神様相手にしたからちよつとお腹が空いてね。悪いんだけビよ
るしへね。』

「まさか…?」

『ちよつと危なかつたけど全員倒しておいたかい。』

『…………プランが負けたんじゃなしホワイトハートが負けたの。』

プランの意味不明な発言を聞かされた瞬間に俺は通話をやめました。

「…………とりあえず帰るか。お菓子買つたら赤字決定だよ。またバ
イトしないといけないかな?」

スーパーで買い物を終えた俺はスーパーより徒歩三分の公園のベンチでぼーと座っていた。

「花火か。買つて帰つたら天界は大火事決定だよね。」

公園より見える高層ビルには株式会社花火と爆発の『日本一』と書いていた。ネプテューヌ達が花火をすると必ず火事になるからいやなんだよね。

「がすがす。」

ふと買つた品物を入れてあつたレジ袋がガサガサと動いた為に見るとそこにはレジ袋に顔をつっこんでいる。ホームレス（ガスト）がいた。

「……ちょっと待てよ。」

「がすがす。お久しぶりですのお師匠。がすがす。」

この人はホームレス（ガスト）この公園に食べ物を持つて訪れると90%の確率で現れる厄介極まりない存在である。以前食べられる野草を教えて以降師匠と呼ばれる様になってしまった。

「誰が師匠だ！？そして何勝手に人様のお菓子食べてやがる。ほらやめなさい。」

「やめるから金寄せよですの。」

「お前本当に何言つてるの！？」

「世の中金ですの。師匠と金は切つても離せないですの。」

「お前は一回自給自足の暮らしを経験してみろ。とりあえずこれで菓子でも買いなさい。」

「話がわかるです師匠。」

俺が500クレジットを渡すと颯爽と消えていった。彼女にも良い就職先を見つけてあげないと駄目なのだろうか？

「最近ゲームギョウ界の平和が保たれているのは良い事なんだけど少し暇すぎるのがネックなんだよねー。」

ベンチに腰を掛けて公園で羽休みをしていた黒龍に先ほどスーパーで買ったパンを千切つて与えてながらこれからのゲームギョウ界について考えていた。

すると公園の端に白をモチーフとした献血車が佇んでいる事に気付く。あまり人は集まつていないのである。

「献血をお願いするですー。」

白い看護服に身を包む一人の少女。名前は確か…。

「あれはコンパさん相変わらずがんばっているなあ。」

コンパさんはよくネプテューヌと一緒に遊んでいた三人組の一人である。ネプテューヌともう一人、アイエフさんに色々と引っ張り回

されて巻き込まれていたなあ。

「そう言えばアイエフさんはリーンボックスで家電製品を販売する大型電気店の店長だつて。かつての悪ガキ三人組もそれぞれの道を進みだしたか。早くネプテューヌにも就活させないとね。」

何やら懐かしさを感じながらも俺は公園を後にして天界へと転移した。

「ただいまー。今帰ったよー。……何この惨状。」

現在の天界の惨状は半分が瓦礫の山。いやもう瓦礫の山。至るところに火の手が回っている始末。

「申し訳ありませんお兄様。500・さんが花火を持ってきてくれたものですから。つい……。」

あちこちが黒く煤けているベールが頭をアフロヘアにして俺の前に土下座。

「わ、私は止めたわよ。」

全身でブラックハートを体現しているノワール。彼女も同様にアフロヘアで土下座

「…貴女が一番フィーバーしていたじゃない。」

ホワイトなんて似つかわしくない状態のブラン。

お前達……！」

「ねふ！？お兄様どうして女神化するの！？」

ちなみにネブテヨー又は何故が無傷だった。

「言わない」とわからないのか?」

「ごめんなさいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！」

その後妹達にお仕置きをした。そして半分程炎上していた天界を再生させるとついでに半分程燃え尽きていたイストワールを再生させた。

「なんで一日でこんなに疲れないといけないんだよ。」

「それがお兄様だからよ。」

「それで納得できる自分が嫌だ。」

お昼からすき焼きという贅沢をしながら俺は自分の運のなさをなげ
いていました。

「おー！ ネプテューヌてめえそれは私の肉だ返しやがれえええええーーー！」

「全ての肉は私の物なのだよー。つていうか私お野菜食べられないんだよね。」

「それならこのお野菜達をお兄様だと想つて食べればいいのですわ。
んだよね」

「この椎茸はお兄様。ああお兄様が私の中にいいいいい……！」

「やめろ。品位が疑われる。」

「やだあ。お兄様のお肉が私の中に……。これ、凄いよ。」

「お前もやるなよー。やるなりはめて野菜でやれよ。みー」

「野菜なんて草だよー。そのせいか口の中が口内炎だらけなんだよね。」

「謝れ農家のの人達に謝れよー！そして口内炎はビタミン不足だよーーー！」

「ボクは野菜も食べれるよ。」

「お願いだから気配もなく現れるのは止めてくれる？ ちゃんと？」

いつからいたのか？ ちゃんとは俺の隣でも凄いスピードで箸を動かして肉達を捕縛していた。

「それはボクに音楽を止めると？ と一緒だからね。」

「何でもいいけどこの野菜食べとよ。」

「別にいいよ。」

「家の妹を甘やかさないでくれるかな？」

「パープルハート様食べないとモグよ。」

「うわあ」の白菜美味しそう。いただきます（棒読み）。「

「随分素直だけど、一体俺がいない間に何があつた？」

「お兄様にとつて巫女服が目の前で引き裂かれるよひな事をされたのよ。」

「よくお前等生きていたな。」

「そう思うならお兄様が大事にキープしているお肉を頂戴。」

「ひとりだけだからな。」

「……愛してるわお兄様。」

「待てよプラン何で肉を全部持つていくー?」

一 ならお兄様私のお肉をどうぞ

一
ありがとうベール
はむはむ

「私のお肉がお兄様の中にいいいいいいいいいいいい！私お兄様に食べられちゃいますわーーー！」

「……それで5つめ・ちゃんいつまでいるの？」

「すき焼きを食べられるまで。」

「……お兄様お肉がない!」

「10人前は入れていた筈なのに…」。

「 私まだ3きれしか食べられてないわ。」

「俺は2きれ。」

「流石に肉はもうないから締めのうどん投入だあーーー！」

締めのうどんはすき焼きの醍醐味なのである。
この世界、こいつ等の事は嫌いでらん。だけど……やつぱり思つてしまふ。自由に生きてみたいと。そしてそんな思いがあんな事になつてしまつなんて今の俺には予想もしてはいませんでした。

次回予告

ユウの前に立つ世界全ての悪アンリマゴ。そしてダークネスハート。それを倒す為にユウは再び罪を背負う。

次回 超次元ゲイムネプテューヌmk2男の娘だつた女神候補生
プロローグ『幼女にはもはや危機感しか感じ得ない』

騙されたなら騙し返せ。

テルズ風スキット
一人ぼっち

いーすん「皆さんすき焼き美味しいですね。でも誰か重要な人物の事を忘れていませんか?ユウによって修理された私は何故か鎖でぐるぐるに巻かれて放置されてしまいました。誰か教えてくれませんか?私は何か悪い事をしたのでしょうか?私はただユウのスペツをかぶつていただけなのに。」

第0話 男の娘な女神様（後書き）

これはシルバーハートの存在を知らない人への説明的なものでした。

プロローグ　『幼女には最早危機感しか感じ得ない』（前書き）

ここからシルバーハートの物語は終わりシルバーシスターの物語が始まります

プロローグ　『幼女には最早危機感しか感じ得ない』

シルバー・ハート side

今俺の立っている場所。そこはまるで地獄であった。

いや地獄その物であった。辺りに見えるのは大量に積み重なった死体。辺りにたち込めるのは死体から漂う腐敗臭のみ。地は枯れて空は血のような赤へと染まる。

生命の息吹きがまったく感じられない場所で俺は対峙していた。全ての歪みとも言える存在ダークネスハートと……。

「信じていたわシルバー・ハート。最期に闘うのは私と貴方であると。

」

「ダークネスハートお前はここで倒す。そして全ての人々の想いと共に俺は闘う。」

「ふふふ、あはははははは……よく言えるわね自らの最愛の妹達を殺しておいて……」

「確かに俺は自らの過ちに気付く事ができずに妹達を手にかけてしまった。だけど俺は絶望しない。諦めない。このバトルファイトの勝利者となつて俺は妹達の想いを、志し半ばで散つて言つた者達の願いを叶えてみせる。」

「いいわ、貴方に決定的な敗北を与えてその愚かな希望も打ち碎いてあげるわ。」

みんな見ていてくれ。必ずダークネスハートを倒して……世界を元に戻してみせる。

「sinnを全ての罪を開放する俺の身体欲しければ全て持つていけ。顕現せよ七つの大罪！！」

俺は肉体を身体を。全てを身の内に眠る七つの大罪を具現化させて世界を導く女神であつて全てを混沌に染める存在。その両方を身に秘めた守護女神sinnシルバーハートへとsinn女神化を果たす。

「嬉しいわ貴方がそこまでしてくれるなんて。なら私も本気で行くわ。来なさい絶対悪・アンリマユ！！」

ダークネスハートの両手に闇の魔力、絶対悪・アンリマユによつて形成された魔力で闇の槍が握られる。そして銀色の悪鬼と化したシリバーハートと世界全ての悪と化したダークネスハートの闘いは開幕する。

そして決着の時が訪れる。

「この一撃にノワールの想いを！！ベールの絶望を！！プランの願いを！！ネプテューヌの愛を！！そしてその身を持つて俺に進むべき未来を教えてくれたイストワールの希望を込める悪鬼絶牙白夜アアアアアアアアアー！！」

俺はその身の全てを持つて最大の魔力をシェアブレイカーに籠める。そして最強の一撃をダークネスハートに叩き込む。たとえこの身がsinn（罪）に喰らいつくされようとも。

「凄い、凄いよシリバーハート！！なら私も世界の歪んだ願いを！」

！全ての悪意を私に集まれそしてシルバー・ハートの希望を打ち砕け
！－ダークインパルス！！』

ダークネス・ハートが両手に握られた槍を一つに連結させて投擲の構えをする。

今世界の罪と世界の絶望がぶつかるそして…………。

「良かつたわねシルバー・ハートこれでこのバトルファイトの勝利者は貴方よ。」

「どうして抵抗しなかった！？」

ダークネス・ハートは槍を投擲はしなかつたそれどころか俺の一撃を受けて身体が一つに別れている始末。

「バトルファイトの勝利者には特典が与えられるのよ。勝利者は次のバトルファイトで奏者の資格を得る事が出来る。」

「次のバトルファイトだと！？どういう事だ！！バトルファイトは終わつたんじゃないのか！？」

「バトルファイトは繰り返される。そして奏者の資格を得た者は全ての記憶を消されて新たな役割を与えられる。私の目的は貴方を奏者にする事だったの。ふふふ、貴方は最初から私の手の平で踊らされていたのよ……」

「詳しい説明を……………！」

俺は七つの大罪によつて喰らいつくされた身体を引きづりながらも上半身と下半身が一つに別れたダークネスハートに詰め寄ろうとするが自らの身体が光の粒子となつていくのに驚き足を止める。

「これはまさか本当に……。」

「 もうならシルバー・ハートまた会いましょうね。そしてまた愛し（殺し）合いましょうね…………。」

その言葉と共にダークネスハートは息絶える。 だが俺にはそんな事を気にしている余裕はなかつた。自らの消えていく身体を見ながら戸惑いを隠せずにかつての守護女神の面影はなく、そこには自分のこれからがいつたいどうなつてしまふのか不安一色にその身を染めた一人の男の娘だけがいた。

「俺はもう思い出せないのかゲイムギョウ界のみんなの事を……
そんなの嫌だ。誰か何か言ってよ。」

次第に俺の目には涙が溜まつていく、そして.....。

「「「「「興奮してきました——」」」

突如そちらへんに転がつていた全ての死体が起き上がり謎の叫び声をあげる。

「はい？」

俺はその光景に頭の中で疑問の嵐が吹き荒れる。いつの間にやら身体の粒子化も止まっていた。

そして死体達がもの凄い勢いで俺に向かってくる。

「懸賞にひなされるシルバー・パートやん可愛こよーーー..」

そして群がつてくる死体達そしてその恐怖に俺は絶叫する。

「いやああああああああ！」

夢から覚めたユウ s.i.d.e

「やつぱり夢ホチですか……。」

そう今まで見ていた光景は夢。誰が何と言おうと夢。騙されたなら騙しかえせ。

「それにしても我ながら意味不明な夢であつたよパトランシユ。ダーケネスハートって何?しかもネプテューヌ達は死んだのか。

「イストワールよお前は一体俺にその身を持つて何を教えてくれたんだ？それにしてもsinnシルバー・ハートかあ語呂が悪すぎだろ。ヤバイ俺自分の夢にまで突っ込み入れてるよ。それにしても嫌な汗をかいだとりあえずシャワーでも浴び……なんださ。」

シャワーを浴びようとベッドから起きた俺の視界に現実を疑つ様な光景が飛び込んでくる。

「世界がぴ、ピンク色になつてゐるだと…………！？」

俺は昨日確かに自分の部屋で眠りについた筈なのだがいつの間にピンク色の夜に迷いこんだのだろうか？

辺りを見渡してもただピンク色の空間しかなくいつの間にか先程まで寝ていたベッドまで消失していた。

「これは初めてのパターンだな。さすがの俺も戸惑いをかくせない。

「あのー。」

不意に俺の服の端が引っ張られる感触と共に女の子が聞こえてくる。直ぐ様振り返つた俺ではあつたがその事を後悔したのは言つまでもない。

「は、初めまして私貴方の、超次元アイドルシルバー・ハートちゃんの大ファンなんです！」

そこにはの博 神社の巫女さんとまったく同じ恰好をした10歳前後の女の子が幼女がいた。髪の毛は白くて腰まで伸ばしている超ロングヘアー、瞳は青…………あれ？こんな人何処かでみたような。

「あ、わかりますか？これシルバー・ハートちゃんの真似をして髪の毛は染めて眼球は取り換えてみました。自分では結構イケテると思うんですけど？」

「そうだ俺だ！俺に似ていたんだ！」

「アイドルの真似をしてそういう事をするファンがいるとちやんから聞いてはいたけどまさか自分がされる日がくるとは…………。」

「とにかくシルバーハートちゃんにお願いがあるんですー。」

「ん? 何かな? 僕に叶えられる事だつたらいいんだけど。」

「私を抱いてください。」

その言葉を聞いた瞬間僕は反射的に逃げよつと試みる。だが残念幼女に手を掴まれた。

「だ、駄目ですか?」

「流石に初対面の女の子にそんな事は出来ないよ。」

「うう、シルバーハートちゃんはファンの女の子を抱くのが趣味だつて聞いてたのにー。」

とりあえずその間違えた情報を君に教えた人物を教えてもらいたい。とりあえず生きていた事を後悔させたいので。

「ならサインください。」

まあそれくらいなら。

俺は幼女にペンを手渡される。色紙かなにかないのだろうか?

「とりあえず何処に書けばいいんだ？」

「背中にお願いします。超次元アイドルシルバーハーツけやんよりおーちゃんへって書いてもらつていいですか？」

「か、構わないけど。」

俺は背中を向けた幼女の巫女服の背中に言われた通りにサインを書く。

「これでいい？」

「はい、ありがとうございますー帰つたりばウスちゃんに連れて
やめますー。」

「友達に最高神がいるのかー？いやあつと名前が一緒なだけであつて。
そう信じたい。」

「ど、どこのピンク色の空間は君が何かしたのかな？出来れば元に戻してほしこんだけ！」

「構いませんよ。」

「構わないのかー？意外とあつただった。」

「でもその前にアンケートを取らせてもらつてもいいでしょうか？」

幼女は何処からともなく紙とペンを取り出す。

アンケート、まさか詐欺か紛いのものではないだろか？

だが幼女はそんな事に気にも止めずアンケートを開始する。

「まず問1男の子と女の子どちらが好きですか？」

「まあ普通に女の子が好きだけど。」

確かに俺の顔はこれだけ変な趣味はないからね。

「では問2貴方はゲームの一週間でレベルと見た目引き継ぐとしたらいどからですか？」

「見た目かな？」

「いくらい週間でも最初から強いつていうのはあまり好きではないんだよね。」

「問3です。闘いには頼れる相棒は欠かせませんか？」

「出来ればほしい。」

アドバイスとかしてくれたパートナーがいてくれるとありがたいよね。イストワール？あれはただの変態。

「問4です。好きな女性のタイプは？」

「料理が得意な家庭的な普通の女の子がいいかな？」

「そ、そんな私まだ結婚なんて考えていませんよ。まずは交換日記

から始めましょう?」

決して君の事ではない。

「問5 これが最後です。家族の絆は例え世界が違つても断ち切れないと貴方は言えますか?」

「勿論だ。絆とは決して断ち切「これでアンケートは終わりです。最後まで言わせて!」

「ではここに名前を書いてください。」

俺は幼女に言われてアンケートの右下にあつた名前を記入する欄に名前を書く。普段の俺であつたなら書く前に何か違法な事がないか確認するのだがこの時は面倒事から早く開放されたいが為にそんな事は気にしてはいなかつた。

「これで終わり?」

「はい。これでシルバーハートちゃんの別世界への移送が決まりました!」

「what?」

「綺麗な発音ですね!..」

「ありがとう、じゃなくて君今何て言つた?」

「それでは別世界に行くにおいて変更された貴方の情報をお知らせしますね。」

駄目だこいつ人の話を聞いてない。別世界に移送とか俺の身体がこの幼女はヤバイと警報を鳴らしている。とりあえずこの空間から脱出しなくては。

「まず貴方の希望通りに力の受け継ぎはせず、移送する世界に合
わせて貴方の力を削減します。」

「な、何を言つ………！？」

幼女に文句を言おうとするが身体から急激に魔力が消費、いやこれ
は抜き取られてくる田の前の幼女に。それと同様に俺の身体から力
が抜け膝を付け。

「それとこの武器は全て預かりますね。」

「なー！？ いつの間に！？」

幼女の手にはいつの間にか俺の身体の中に取り込んでいるセブンソ
ーデ（魔剣）の全てがあった。

「でもシルバー・ハートちゃんの武器はやっぱり双剣ですよね。菊壱
紋字と零刹那はお返しします。但しこの二つからも力は全て抜き取
らせてもらいます。無論連結して使用しても童子切りにはなりませ
ん。ただの剣と成り果てています。」

この幼女まさか剣自体から力を抜き取るといったいるのか！？ そんな
事が出来るなど普通ではない。いや幼女である事自体が普通ではな
い！？

「お前は一体なんなんだ！？」

俺はふりつきながらも立ち上がり幼女に零刹那の切つ先を向ける。

「そつといえは自己紹介がまだでしたね。私の名前は神位3位の次元神オーディン。気軽におーちゃんつて読んでくださいね。」

「次元神だと…？それにオーディン、まさかグングールの。」

「いえまったく関係ないですよ。」

「ないのかよ…！」

「あ、でもロンギヌスならありますよ。」

「なぜお前がもつてているんだよ…！」

「では続けて肉体の変換を始めますね。」

人の話を聞けよ…！…そして肉体の変換つて何…？

そう突っ込みを入れようとした俺であったが突如身体が激痛に襲われて声すら発する事ができなくてなる。

「ぐつ、が、あぐつ…？」

「身体の変換には激痛が伴いますが我慢してくださいね。」

そういう事は先に言つてもらいたいが、俺はまるで神経その物を剥ぎとられるかの様な痛みに耐える事しか出来ないでいた。

「痛みに耐えてあえぎ声をあげるシルバーハートちゃん何だかとてもそそる物が、よし最近買い直したばかりのハンディカメラで撮影を…！」

この激痛が収まつたらこの幼女ととりあえず殺す。

じまじく待つべきだ。」

「ウ？ s.i.d e

「身体の変換が終了しましたよ。どんな感じですか？」

「最悪だよ。身体が何か変な感じ。まるで自分の身体じゃないみたい。……それに何これ身体が縮んでいる！？」

「一体何がどうなって！？」

「それにしても可愛こすぎますよ。シルバー・ハートちゃん……いいえ今はシルバー・シスターちゃんと言つべきですね。」

「シルバーシスター？何を言つてるの私はシルバー・ハートって私！？何で私！？」

「どうして私は私なんて言つてるの！？それに何この言葉使つてまるで女の子！？」

「だつて貴女が言つたじゃないですか男の娘より女の子の方が好きだつて。だからわざわざ身体を女の子にしたんですよ。」

「ま、まさか！？」

私は自分の身体をぺたぺたと触つて確かめてみる。

「お、女の子になつているだと…………！？」

「はい、とっても可愛いですよ。基本的な見た目は変わつてしませんがちゃんと胸もありますよ。えいっ！…」

突如飛び付いてくる次元神。

「触るな、揉むな！！」

「大丈夫です！！女の子どうしなんですから。…………慎ましやかですがこれはなかなか。」

「いい加減にしてーーー！」

必死に身体をじたばたと動かすが次元神、いやもう幼女神で通して行こう。幼女神を振りほどく事ができずにされるがままにされてしまつ。何をどうされているかは「想像にお任せします。

再度しづらへお待ちください。

「次元神オーディンとあろう者が取り乱してしまいましたね。」

「もうお嬢にいけない。」

「それなら私がもらいますよ。今は女の子だから正確にはお嫁さんですけどね。」

「そんな事は知らないが……。」

「詳しく説明をしてもらおうか。」

「今崇高なる神々の間では妹ブーム。そして簡単に言わせてもらえば今の貴女は女の子で女神候補生のシルバーシスターちゃんで私の

妹で嫁です。」

……余計に分からなくなつたんだけど。

「最初のアンケートに答えてもらいましたよね。あれの通りに貴女の能力及び肉体を変化させたのです。別世界に行つてもうう為に。」

あれで……。

「ちゃんと最初に説明してよ……」

「だつて説明したらアンケート受けてくれなかつたですよね？」

「当たり前だよ。とりあえず早く元に戻して。」

「『』めんなさい。無理です……つていうかしたくないです……」

直ぐ様頭を下げて詫びをいれる幼女神。だが顔が凄く二口二口している。絶対に反省してないよねこの幼女。

「とりあえず今の貴女はシルバーハートちゃんの時程の力はないですからね。」

「そりなのかー。つて違う……何故だ何故戻せないの……！」

「だつて戻すには最高神であるゼウスちゃんの許可がいるしー。ゼウスちゃん百合つ娘だから絶対に無理だもん。」

そんな風に言つたところで今の私にはウザイだけ。それよりゼウス貴方は何なんの！？もう私意味がわからない……

「そ、だ貴女はに紹介したい娘がいるんだファイブスちゃん出番だよー。」

幼女神が巫女服の懷から一枚の『ディスクらしき物を取り出すと地面に叩きつけるかの如く投げつける。てっきりディスクは粉々になるかと思われたが突如発光する。そして光が止むと光の中から一人の女の子が現れる。赤紫のストレーントの髪を持ち、瞳は青く輝き明確なる強い意思を感じ取れる。

「彼女は人型ゲームキャラのファイブス・ディスクちゃん。貴女のパートナーになる娘だよ。」

「以後よろしくお願ひしますマスター。それと私の事はファイと呼んでください」

幼女神の紹介を受けたファイブス・ディスクはまるで臣下の礼の様に膝を付く。良かつた。どうやらある程度は普通の娘みたいだ。イストワールらしき者だったらどうじょうかと思つた。

「私の事はマスターなんて呼ばなくていいよファイブスさん。」

「マスターとか堅苦しいのは嫌だからね。

「わかりました。舌を噛みきります。」

「この世界に神はない。……いや一応田の前にいるのか。

「どうしてそうなるのー?」

「マスターをマスターと呼べなくなるくらいなら、そしてファイと呼んでくださいのなら口を躊躇みります。」

やつぱり普通じゃなかつた。

「それでマスター口を出してください。躊躇みりますので。」

「私のを躊躇めるのー。」

「だつて私痛いの嫌ですし、そしてビヘヘ紛れでベロチューしよつかと……。」

「よろしくねファイ。気軽にマスターって呼んでね?.

「しかたありませんマスターの頼みならしちゃう。」

怒こつたらきっと負けなんだろう。

「とこりでゲームキャラって何?.

私はファイに問いかける。

「何なんですか?」

ファイは幼女神に問いかける?

「何なのかなあ？」

幼女神は俺に問いかける。

「さあ？ つて二人が知らない事を私が知る訳がないでしょ！？」
「こいつ等私をからかっているのか！？」

「マスターつて弄りがいがありますね。」

「ファイブスちゃんに本人の前では言つたら駄目だよ。確かに弄り
がいがありますけど。」

「落ち着け私、怒つたら負けだ。クール、クール。」

怒つたらこいついう奴等は付け上がるに決まっている。

「結局ゲームキャラつて何？」

「…………。」

本当に知らないのか……

「とりあえず話もまとまつたといひで別世界に送るね。」

「何処がどう纏まつたの？」

「マスターそこは空氣読まないとKKKKKって言われますよ。」

Kが明らかに多い気がする。

「因みに意味はK・空気Y・読めないK・けれどもK・可愛こY、とこうい事です。」

「…………突つ込むだけ無駄みたいだね。」

何かを悟つた気がする。

「次元神の中でも優しいおーちゃんが簡潔に纏めましょ。シルバーハートちゃんは別世界への移送をかけたアンケートを私に騙されて無理矢理やらされて、アンケートの解答結果によつて力の殆どを奪われてシルバーシスターちゃんに劣化しちやつたわけです。そして今まさに別世界へと新たな相棒であるファイブスちゃんと共に旅立つ事になりました。」

それで上手くまとめたつもりか?

「まあいい。この姿で元の世界に戻ればどんな恐ろしい目に合ひか予想はつく、ならばいつそのこと別世界で別の人物として生きるのも悪くないかもしねないね。寧ろこの世界から開放されたい。」

「開き直りましたねマスター。」

「開き直つたね、シーちゃん。」

「別に開き直つたわけではないよ。それとシーちゃん言つた。まあ別世界に行くのは構わないんだけど、一つ問題があるんだけど……」

「…………。」

「問題? 何かな?」

「ああマスターと一心同体の私にはわかりますよ。…………エッチな事ですね。」

「ふ、ふええつー?」

「違うよーー断じて違うからねーー!」

「分かってますよ。単なるジョークですよ。」

「な、何だ期待して損したよ。それで問題って何なの?」

「…………妹達だ。」

「「「ああ、あの変態女神達。」」

「何故そこでハモる、そして何故知つている。

「…………私が居なくなつたら確實にあいつら + が世界を崩壊させ
かねない。」

「それなら大丈夫ですよ。私が何とかします。」

「何とかするつてお前がか?無理だろ?。」

「いえ、大丈夫だと思いますよ。このクソ幼女見た目これですけど全盛期のマスターの二倍強いですよ。」

「これがか？」

「キラッ」

「ええこれがですよ。」

「キャハッ つていた！？」

「「黙りなさい。」」

とつあえず頭を殴つておいた。

「『めんなさい。でも私本当に強いんですよ。えいつ……』

何故抱き付く。…………つて。

「痛い、ちょ、洒落にならないくらい痛い……腰がくだけるから……お前の強さはわかつだから離れて……」

「えへへシーちゃん良い匂いー。」

駄目だこの幼女神早く何とかしないと。

「ファイ何とかして！」

「…………え？」

そこで何故私に頼むんですか？って本当に不思議な顔しないでくれませんか！！

「わざわざ……」

『マキシング』

やばい何か碎けた。

再再度お待ちください。

「それでは初回特典としてユウちゃんの服をチョンジー！」

「意外とまともなのか？スカートはいただけないけど。とりあえず初回特典って何？」

私の服装は「ユウちゃんですよ。」

「いやそれはそうだが。」

「違うよユウちゃんはユウちゃん。そしてその姿はユウちゃんの『スプレー。だけど性能はピカ一だよ。』

今の服装は服の上から腕に「ガントレット」と「プレートアーマー」を装着するという奇抜なファッショニ。そして自分がミニスカートを穿く事に戸惑いを隠せないでいた。

「あればゾンビですか？」

「いいえ女神候補生です。」

「こいつら何なんだろ？」「

「無論ネクロマンサーの力も付属するよ。死んでから一時間以内の人なら復活可能だからね。」

「理解が追いつかないよ。」

「考えるな。感じろですよマスター。」

それは何か違う気がするよ

「それでは今から別世界へ移送しますからね。」

「随分と唐突。そしてここまで来るのに一体何ページかかったことか。」

「マスター、メタ発言は黙田ですよ。」言わなきゃやつはいられないよ。

といいでメタ発言つてどうこいつ意味だらうか？

「 もう……無視しなこでよ。」

「 ……わざわざね。」

「 パンパン跳ねるな本当に血管が切れそうだ。

「 シーちゃん、とつあえず何かあつたら直ぐにお姉ちゃんに連絡するんだよ。」

誰がお姉ちゃんだ。

「 それとはこれ友達から死ぬまで借りてきた夜笠。」

幼女神から渡されたのは黒いコード。夜笠つて友達に炎 灼眼の
ち手でもいるのか！？

「 因みに、名前はシャ たん。」

そつつか！？

「中にはいっぱいお助けアイテム入れてあるからね。」

投げ捨てたら駄目だらうか？

「捨てたら発情するからね。」

「こいついすれ殺す。」

「それでは良き旅をー。落とし穴オープンーー！」

「しまったー怒りに捕らわれて、つてまじで落とし穴ーーー！」

「マスター」これが所謂お約束つてやつですね。私また一つ学習しました。」そんな事学習しなくていい。

幼女神によつて落とし穴に落とされた私はどうやらこのまま別世界へと行つてしまつようである。

「そういえば……。」

「私つて何の世界にこへのかな？」

「…………あ？」

とつあえず前途多難の様である。

神位第三位の次元神オーディンによつて別世界へと飛ばされたシリ
バーシスター。辿り着いた場所は世界の墓場。そこで出会うのは一
人の女神候補生。

次回 男の娘だつた女神候補生
第1話 通りすがりの女神候補生。
全てを破壊し全てを繋げ。

プロローグ　『幼女には最早危機感しか感じ得ない』（後書き）

現在のユウの状態

身体能力　足の速さ以外は全て劣化

魔力等も全て劣化

使用できる魔法も低級の物のみ。

見た目も幼くなっている。

主人公及びオリキャラの紹介（前書き）

題名の通りです。追加予定あり。

主人公及びオリキャラの紹介

・ユー

性別 男の娘だった女の子女

CV（妄想） 月宮みどり

身長 146cm

体重 38kg

B慎ましやかWとりあえず細いHご想像にお任せします。

見た目はこれはゾンビですかのユーフリウッド・ヘルサイズそのもの。ただし髪の色は白で長さは腰に届く位。瞳は青い。

服装もこれはゾンビですかのユーフリウッド・ヘルサイズその物。ガントレットやプレートアーマーも標準装備。その上からさらにオーディンよりもった夜笠を羽織っている。ミニスカートの下にはスパッツ着用。

使用武器 菊壱紋字（菊壱紋字は液体金属で出来ていてその形状を斬艦刀に変える事が可能。その際の名は斬艦刀・菊。）、零刹那という双剣。色は一つ共に銀色。二つの剣を連結して大太刀として使う事もできる。（本来は真打童子切安綱という妖刀であった。だがオーディンによって童子切り本来の力は失われている。）

・マジエコンヌを倒して平和になつた無印のゲームギョウ界より超次元ゲームネプテューヌmk2のゲームギョウ界に次元神オーディンよつて送り込まれた。オーディンによつて性別が強制的に女の子に変えられた。

見た目も少し幼くなつてゐる。呼び出された場所であるギョウカイ墓場でネプギアに出会い。丁度その時ネプギアとジャッジ・ザ・ハーデの闘いの真つ最中でそこに介入して通りすがりの女神候補生のシルバーシスターと名乗つてしまい、以後その名を貫く。面倒事に巻き込まれやすい性質になつてゐるのは変わらず。そして何故か軽度の方向音痴になつてゐる。炊事洗濯などが得意などの家庭的な面もある。お菓子なんかを作つて食べるのが好きだがネプギア達によく強奪され食べられてしまう。

お化け等のホラー系が苦手。最初からレベルが高めでネプギアを助ける為にギョウカイ墓場で闘つた際はジャッジ・ザ・ハーデと相討ちではあつたが互角に渡り合つ。 双剣を使い手数で攻める。

その為APがかなり高め。たが攻撃力は低め。スピードはアイエフを凌駕する。

・女神候補生 シルバーシスター

髪の毛は白から銀色に変わる。瞳の色は青から金色へと変わる。何故かクーデレっぽくなる。

プロセッサユニット・シルバmk2

ユウが以前使つていたプロセッサユニットの劣化版。名前にはmk2とあるが性能は以前のゲームギョウ界で使つていたものより性能は落ちる。だがネプギア達のプロセッサユニットと同等の性能を持つ。見た目はユニが使用するプロセッサユニットクレイドルの色違いで銀色。そして胸の部分に変身前のプレートアーマーを腕にはとガントレットを装備している。レオタード状ではなくスパツツ状。

そして何故か夜笠を羽織る。

スキル

・見よう見まね燕返し

某アニメの佐々木さんの燕返しをその名の通りに見よう見まねでやつたらできた技。一度の剣撃で二度の斬撃を放つ。

騎乗スキル『S』

その名の通りにありとあらゆる乗り物を操る事ができる。モンスターでも。

方向音痴スキル『D』

その名の通り絶度の方向音痴起こすスキル。現在は軽度だが発展する可能性もあるとの事。

ねぐらまんさー

死んでから一時間以内の生物をゾンビとして蘇らせる能力。

ファイ

妄想CV 広橋涼

正式名称ファイブス・ディスク

見た目はモンスターに出てくるエセルトレーダ。服装も同様に。

オーディンよりユウに託された人型のゲイムキャラ。ユウの事をマスターと呼び慕う。

たがユウをからかってその反応を楽しむのが趣味。マスターであるユウと自分の事以外は気にも止めていない。何故か教祖イストワールとは仲が良い。ユウの作ったお菓子や料理を食べる事が好きでそれ以外はたべない。

戦闘では常にユウのサポートに徹して他の誰にもユウとのカップリングを許さない。炎系統の魔法を使用する。

ユウのサポートを行う事によってユウの低い攻撃力と防御力をあげる。魔法によつてユウの剣に炎を宿す事もできる。単体で戦闘を行う事も可能。典型的な遠距離魔法タイプ。接近戦は大の苦手。ユウの頼れるパートナー。

スキル

・ふあいあ

対象に向かって炎をぶつける低級魔法。

・ふあいあすとーむ

対象を炎の渦に閉じ込める中級魔法。

・ぎがんとふあいあ

対象を最大出力の炎で焼き付く。

ふあいの加護

ユウ限定

ユウの剣に炎を宿らせる攻撃力をあげる。ユウ以外の人物に使うとスキルを封じる。

ふあいの癒し

ユウ限定

ユウの傷を癒す。それ以外の人物に使うとダメージを与える。

神位第三位 次元神オーディン

愛称 おーちゃん

妄想CV 新名彩乃

見た目は11eyesのリゼット・ヴェルトルを少し幼くした感じ。

服装は博 神社の巫女服。

ユウを騙してシルバー・スターに劣化させて別世界のゲームギョウ界に送りこんだ張本人。

その実力はシルバー・ハートだった頃のユウの三倍だそうだ。自称ユウの大ファンで涼しい顔してセクハラ紛いの事をする（ユウにのみ）。

次元と次元を行き来する力を持っている。

神位第一位 ザ・ゼウス

妄想CV 新名彩乃

見た目は11eyesのリーゼロッテ・ヴェルクマイスター。

神位第三位のオーディンとは双子の姉妹でゼウスが姉。
彼女もまた自称ユウの大ファン。

実はユウを性転換させて別世界へ送るのを考えたのは彼女である。
その理由はゼウスは超百合っ娘であり初めてユウを見た時ユウこそ
が自分の運命の相手であると考えたが男の娘である事実を知つてしまい、絶望してしまう。だが彼女は考えた男の娘なら女の子にしてしまえばいいと。

見た目や言動とはちがい中身は純情な女の子。よくオーディンに卑
猥な事を言われたりすると鼻から愛を吹き出して失神するほど。

実力は未知数。

主人公及びオリキャラの紹介（後書き）

うーむ。解りづらいかもしない。何か質問があつたら「自由にお願いします。

通りすがりの女神候補生（前書き）

ストックを全て投稿する勢いで行ってみようか。

通りすがりの女神候補生

「ウ side

幼女神によつて別世界へと飛ばされた私はとりあえず現実逃避をしていました。

「きつとこれは夢に違ひない。田が覚めたら元の世界にいるに違ひない。」

「マスター紛いもなくこれは現実ですよ。そして今のマスターは女の子、しかもかなりの美少女。」

「……お願いだからそれを言わないで。」

「別に元々女の子みたいな顔をしているんだからいいじゃないですか。」

「よくないから……なんとかして男に戻らなくては。」

「無理だと思いますが。」

「それはどういう事だ?」

「マスターの性別を変えたのはあの幼女神です。元に戻すにはあの幼女神に再び会わなくては行けませんよ。」

「……あれにか。」

「会いたいですか?」

「遠慮しておくれよ。」

「それが懸命です。」

「まあきっとそのうち何とかなるだろ。とりあえず今自分の置かれている現状を把握しておこう。」

私は辺りを見渡してみる。

「何やら空は赤い。そして辺りには「マリリキ」物がいっぱいあるけど。…………ここはどこだーーーやっぱ自分自身の置かれている状況すら把握出来ていないよ私ーーどうしようつア。」

「困っているマスターも可愛いです。そしてそんなマスターに私は幼女神に渡された夜笠を調べるべきとお知らせします。」

「夜笠、確かあの幼女神が中にお助けアイテムが入っていると言っていたな。どれどれ。」

私は夜笠の中に手を入れて中を探る。

「…………何か掴んだ。」

「マスターそのまま引っ張つてーーー引っ張つてーーー！」

「よし」の現状を把握する事ができるお助けアイテム出でこーいーーー！」

私は掴んだアイテムを力いっぱい引き抜く。

「これは本？」

私が取り出したアイテムは赤い本であつた。表紙には『神位第三位オーディンの全て（初心者編）』とシックリビングの満載の本であつた。

「あいつは何がしたかったの？」

「脚本家（幼女神）の悪意を感じますね。とりあえず燃やしましょうか？」

「 そうだね、嫌な予感しかしないけど。はいどうぞ。」

私はファイに本を渡す。

これ忘年会の隠し芸で使えるかもしない。ファイが口から炎をして本を燃やすのを見つめながら私はそんな事を考えていた。

「カツコイイでしょう？」

隠し芸で使えるかもと考えていた事は言えない。

「あ、うん。そうだね。それにしても」「」は一体どこなんだらうね？」「この夜笠は使い物にならないし、打つ手なしかな？」

「ああもう困ったマスター萌え萌えです。しかたありません私は優しいですから教えてあげます。」**ヒヒ**はギョウ界墓場です。

「ギョウ界墓場？ギョウ界墓場って何？ファイは何か知ってるの？」
「尺取り虫以下を使い道のない雑種が行き着く墓場です。まあマスターと私には縁も所縁もない場所ですよ。」

「せりに分からなくなつたよ。」

「何ですか、モー。」

それは「せりの台詞なのなのだが……」。

「ギョウ界墓場それはゲイムギョウ界で死んだ者達が辿り着く場所ですよ。」

「…………ちよつと待つて……今ゲイムギョウ界って言わなかつた！？」

「言いましたけどそれが何か？」

「私つて別世界に行つたんじゃないの！？」

「もしかしてマスター知りませんでしたか？ここはマスターがいたゲイムギョウ界とは少し違うゲイムギョウ界。簡単に言えば並行世界とも言いますね。スペツツな女神とか魔法少女な女神とかいませんからね。」

いたら私の精神は擦りきれているだろ？」

「ところで私はこの世界でどうすればいいのファイ？」

「私に聞かれても困ります。聞くならあの変態（幼女神）に聞いてください。」

「…………とりあえず辺りを歩いてみよつか？」

「無視ですか？スルーですか？現実逃避ですか？だけど私は優しいですから許します。マスター歩くながら手を繋いでください。」

「はいはい。ありがとうございます。」

アイの手を私は優しく包む様に握る。ファイも同じように握り返してくれる。手を繋ぐつていうのも改めてするとなんだか恥ずかしいな。

「あ、マスター今私の手の暖かさにドキッとしませんでしたか？」

「…………少しだけ。」

「マスターって結構顔に出ますね。」

「出でるのーーついつい顔を触つて確認をしてしまつ。」

「本当にマスターは可愛いですね。」

「ウ&ファイ散策中

「それにしても空は真っ赤、辺りは何やらジャンクっぽい物だらけ衛生面はあまりよろしくなぞうだね。」

「ナーナは氣にするといひではないと想いますが…………。」

「いやいや結構重要だよ衛生面…………それにしても一体私はどうなつてしまつのであるつか？」

「一つ言える事は私は何があつてもマスターの味方です。例え世界の全でが幼女になつても私はマスターの味方です。」

「世界の全でが幼女にはならないと思つけど一応ありが…………！？」

ファイにお礼を言おうとしたその時だった。地面が軽く揺れる程の衝撃が辺りを襲う。

「今の衝撃は…………。」

「結構近いですね。たゞ一二三から遠くはないですね。」

「金属がぶつかり合つて。たぶん誰かが戦つているんだね。」

「行くんですか？」

「まあね。もしかしたら誰かがいるかもしれないだろし、うまく行けば話しかけるかもしれないからね。」

「…………マスターに友好的な人がいるとは限りませんよ。もしかしたらマスターに危害を加える人達がいるかもしれません。それでも行くんですか？」

「なら」）をずっとさよつていいとでも思つのか？私は何もしないでいれる程我慢強くないからね。もし大変な事になつた時は「私が助けますよ。」…………それなら問題ないね。」

「まったくマスターには苦労させられますね。先が思いやられますね。とりあえず危険になつたら無理矢理にでもお持ち帰りしますからね。」

「お持ち帰りはしなくていいけど頼りさせてもらひつよファイ。」

なんだかんだ言つてくるけどファイも頼りになるね。どこかの史書とは大違ひだよ。

「了解しました。…………確実にマスターの中で私への高感度はうなぎ登りでしょうね。計画通りです。」

「何か言つた？」

「いいえ、何も言つていませんよ。さつさとこましょ。」

「ウ&ファイ移動中

戦闘が行われているであろう場所へと向かっていた私とファイであつたが着いた場所では恐るべき光景が繰り広げられていた。

「巨人と女の子が戦つていい？」

「マスターこれは凄い所でくわしましたね。あの黒くてでかいのはギョウ界墓場に封印されていた巨神兵での白くて破廉恥な恰好をしている、ゴリラは巨神兵を鎮める巫女なんですよ。」

「そ、そつなの…？」

「勿論嘘ですよ。あの『カイ』のは知りませんが白いゴリラは確かプラネットユースの女神候補生だつたと私は思います。もしもゴリラは虫。」

ファイはあの女神候補生さんに何か恨みでもあるのであるうづか？

「マスター見てるだけでいいんですか？何か凄い事になつていますよ。」

「…………え？」

私はファイに言われて闘いを繰り広げている一人を見る。

「MPB」オーバードライブ…！」

最近の女神もといこの世界の女神候補生はあんな凄い武器を使つているのか。なんだオーバードライブ？車でも運転するのであるうか？

「どのような愉快な事を考へていいのかは知りませんが早く黒いのに加勢しましょう？」

「いやいや加勢するならあの女神候補生の娘に加勢しようよ。みづよ。」

「駄目ですよ。マスターは攻略する側ではなく攻略される側何です

からね。全てのフラグは私が立てる予定ですが。」「

ファイが言っている事のほとんどが私には理解出来なかつたのだけれどこれは私が悪いのであるうか？

「よし……良いですよ黒いの。そのままあの白いゴミ虫を潰すんです！」

「つて…? まづい…!」

ファイの声に思考の渦より呼び戻された私の目に入つて来たのはプラネテユースの女神候補生が今まさに黒い巨人の戦斧によつて断罪されるところであつた。そしてそれを見た私は反射的に夜傘を羽織り夜笠の中に収納してあつた零刹那と菊壺紋字を取り出して黒いのとプラネテユースの女神候補生の間に割り込む事が出来る場所へ向かつて全速力で駆ける。

「マスター足早すぎでしょ!…50m何秒ですか!…?」

確かに性転換させられてから身体は軽くなつたのだが、突つ込むべき場所はそこではないと思う。

ネプギア side

プラネテユースの女神候補生のパープルシスターである私ネプギアの心は恐怖と絶望に包まれていました。

「弱い。弱い者との闘いはつまらん！…弱い者は死ね！…」

私、死ぬんだあの斧で切り裂かれて死んじゃうんだ。
いや、死にたくない。死にたくない、
また負けちゃう。

「ギアちゃん！」

アイエフさんとローパさんの叫び声が聞こえて来ます。だけどわたしの身体は恐怖に支配されて身動き一つ動かす事ができません。

死にたくないよ
負けたくないよ

そして私の身体は真っ二つに切り裂かれ.....。

「わせないーーー！」

「…………？」

私の身体は切り裂かれる事はなく私の命を刈り取る筈だった斧は白くて長い髪を持つたまるでお人形さんの様に肌の白い女の子が銀色に輝く一振りの剣を左右の手に持ち交差させて受け止めていました。

「せええええい！！」

「何だと！？」

そのまま白い女の子は斧を切り払います。凄いあの娘強い。きっと
私なんかよりも強い。
それにとっても……。

「綺麗。……貴女は？」

「貴様何だ？」

偶然にも私とあのジャッジ・ザ・ハードの問い合わせが重なる。

「…………行きますプロセッサユニット装着。」

その言葉と共に女の子の身体が光りに包まれます。
これつてもしかして私と同じ…………。そして光が止み少女が姿
を現します。

「なるほど貴様もそつかそこの小娘と同じか。」

「私の名前はシルバー・スター。通りすがりの女神候補生。記憶し
ておきなさい。」

銀色の…………私と同じ女神候補生。

ギョウ界墓場でユウは再び剣を握る。だがそれはユウの昔との別れ
を、決別を意味するのであった。

次回男の娘だつた女神候補生

第一話 『この世界に来てから良い事が一つもない』

目覚めろその魂。

ドーチャーの部屋

この二つは、どちらも日本語で書かれており、日本語の文法や構造を学ぶうえで非常に有用な文書です。

「アサイト」もまたアシスタントのアライです。いいい。

「自分で毒舌って……とりあえずこの二二二初のケ
ストは。」

「おー「どうもー！神位第二位の次元神オーディン事おーちゃんだよー！」

ファイ「なんで初ゲストがこれなんですか？」

「——『それねえ』」

おー「細かい事は気にしないで行けりよ。はいお土産の黒棒だよ。」

「ファイ、意外と美味しいですね。」

ユーハカリカリ。

おー、今日は私達神々について説明だよ。

「ファイ、『神と言えばマスターも神なのではなかつたのですか?』

おー「そうだけど違うんだよ。コーチさんはゲイムギョウ界の神だけど私は全ての次元、全ての世界を管理する神なのだよー。」

ユー「なるほどー。つてやうやく時間だね。」

ファイ「悲しこぢすたどお別れの時間ですよ（しゃしゃ）。（さよなら）」。

おー「全然悲しそうじゃないね。まあ、ここやつと田舎がある事を

信じて今日は帰るね。バイー。」

ユー「バイー。」

ファイ「バイー。では次回もお楽しみにー。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5219z/>

超次元ゲームネプテューヌmk2 男の娘だった女神候補生
2011年12月17日20時04分発行